慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	武田清子編 思想史の方法と対象：日本と西欧
Sub Title	
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.314(106)- 316(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0106
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新しい一つの道標を樹立したという意味で、その成果は極めて高く評価されよう。大方の一読をすすめる所以である。（青木書店・A5・三〇七頁・九五〇円）―島崎　隆夫―

＊　＊　＊

武田清子編
『思想史の方法と対象』
――日本と西欧――

本書は国際基督教大学のアジア文化研究委員会が、日本・中国・インド等アジアにおける伝統的諸思想とキリスト教との相互影響の問題を人間観や歴史観に焦点をおいて追求する為の基礎的作業の一つとして、約二ヵ年に亘って開設した思想史の方法論に関する連続講義に、加筆したものである。丸山真男「思想史の考え方について――類型・範囲・対象――」、高坂正頭「思想史の方法概念としての世代の概念とその取り扱いについて」、鶴見俊輔「転向研究の方法」、大塚久雄「東西文化の交流における宗教社会学の意義――マックス・ウェーバーの『儒教とピューリタニズム』を中心に――」、中村元「日本の思想の世界史的理解」、家永三郎「日本思想における外来思想の受容の問題」、竹内好「方法としての『アジア』」、西谷啓治「日本における伝統的宗教意識」、武田清子「キリスト教受容の方法とその課題――新渡戸稲造の思想をめぐって――」の九篇を収めている。執筆者は見られる様にさまざまな傾向を示して居る。

丸山真男氏の巻頭論文は、思想史の諸類型をあげた後、思想の意味乃至価値を測定する基準として、解答の徹底性・浸透範囲または流通範囲・思想の幅乃至包括性・（論理的）密度及び思想の多産性をあげ、次いで思想史を音楽の演奏になぞらえ、思想史はいわば追創造ナッハシェップフェンであって、「事実にだけへばりつくということにだけ関心のある人、あるいは対象に触発されて自己のイマジネーションを高揚させることにまったく不感症な人」「資料の主体的なコンストラクション」の出来ない人は思想史に向かないし、他方では「これと全く反対に資料による客観的制約、歴史的な対象それ自身によって枠をはめられることの厳しさに耐えられないところの『ロマンティスト』や『独創』思想家もまた思想史家に向かない」と明言している。最後に、「現在を基準にして過去を裁くか、現在のイメージを過去にちりばめる」思想史の不毛性を指摘し、過去の思想はどっちの方向にでもいき得る可能性において理解されねばならぬと主張している。以上の意味でこの論文は本書の巻頭を飾るにふさわしい最も重要な意義を有するものである。第二論文で高坂氏は世代＝文化荷担者Kulturträgerの更迭は激しい歴史の動きの中では新旧思想の対立を意味したとされ、おとぎ話や民間伝承などを生み出す無自覚的大衆と、明確に生の自覚をもつすぐれた天才とを媒介する「一応『時代の教養』を担うひとびと、いわば知識人たちをも含んで『世代』Generationを構成するひとびと」の役割を指摘し、天才やかなりすぐれた人々は「時に適わざるもの」として次の世代により受容され浸透させられる。時代とはこの様な世代の交替を主体とするものだとされる。しかし、一定の「生の意識」「集団の精神」の担い手としての、「社会的」で「しかもある長さの歴史的期間を区切るものでもある」世代という概念を思想史の研究上に敢てもち出す必要がどこにあるのか。たとえばウェーバーの特定の歴史具体的内容をもつ「社会層」に比して、どれだけ有効な分析要具たりうるか疑いなきを得ない。第三論文で鶴見

氏は「転向」の非連続性＝出発点への復帰という近代日本思想史の根深い病患を論じておられるが、「近代日本思想史講座」（筑摩書房刊）のすばらしい諸成果や丸山真男「日本の思想」また思想の科学研究会の共同研究「転向」（上・中）などとともに考察する必要をここで指摘しておきたい。第四論文で大塚氏はウェーバーの「宗教社会学」第一巻所収の「儒教と道教」中の一章「儒教とピュウリタニズム」を、ヨーロッパの学問方法によりアジアを研究するという問題・キリスト教信仰とアジア文化との関連という観点から紹介しつつ、文化諸宗教の神義論Theodize→社会思想・社会批判・経済倫理・人間観の面から東洋と西洋の文化や社会の基本的構造の比較研究を進める手懸りを提供して居られる。禁慾的プロテスタンティズムの社会思想・社会批判とマルクス主義との関係、宗教を通じて社会現象を見てゆくという方法など重要な方法上の問題がとりあげられているが、残念ながらここでは紙幅の都合で割愛せざるをえない。中村氏の第五論文は、思想史上の類型現象をやや過度に迄対比して居られるが、類似現象は元来夫々異った歴史的枠をもち、質を異にするものであるから、我々の興味は氏の指摘される東洋と西洋の差異が何故生じたかという点に注がれるべきである。家永氏の論文は日本に外来思想が輸入された時に必ず見られた「変容」の問題をとりあげ、それを主体的条件の未熟に帰して居られる。仏教の魔呪性・無常観・「深い苦悶においてでなく、むしろ美的享楽生活」という角度からニーチェを捉えた」高山樗牛の「牙を抜かれたニーチェ」理解、抵抗権とか革命権の面を脱落させた民主主義、キリスト教の国家主義化などはその例証だとされているが、他方土着的なものと断絶関係に立つものもない訳ではないとされている。竹内氏の論文も同様の問題を提起されて、外圧による近代化を如何にして内発的なものに出来るかと問い、現代のアジア人が考えている事は、「西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために西洋をもう一度東洋によって包みかえす、逆に西洋自身をこちらから変革する、文化的な巻き返し、あるいは価値の上の巻き返しで、東洋の力が西洋の生み出した普遍的な価値をより高めるために西洋を変革する、これが今の東対西という問題点になっている。これは政治上の問題であると同時に文化上の問題である。……その巻き返す時に、自分の中に独自なものがなければならない。それは何かというと、おそらくそういうものは実体としてあるとは思わない。しかし方法としてはありうるのではないか。」という悲劇的結論に到達される。嘗て「近代の超克」（「近代日本思想史講座」第七巻、筑摩書房）を書かれた氏に私はここで超克すべき「近代」＝「西洋の生み出した普遍的な価値」とは何かと問いたい。「自己の中に独自なもの」、そういうものの「実体」を家永三郎著「近代精神とその限界」（角川新書）は示唆していると考える事は誤謬であろうか。西谷氏の論文は日本の伝統的宗教意識は「実在感」であって、魔呪的・自然神的・シンクレティズム的宗教意識という根源にたえず還元することが新しい創造の条件であるとされる。かかる原始的・自然人的精神構造論が前出竹内論文と（竹内氏の意図に反して）接合されれば、人はそれが、ひとたびは世界史によって審かれた日本のアンシャン・レジームの論理そのものである事に想い到るであろう。武田氏の新渡戸稲造論では、日本における キリスト教受容のあり方としては内村鑑三とは異る型ではあったが、「日本の精神的土壌の深部に価値の変革をおこし、民主主義が草の根から芽を出し、育ってゆくためには、

新渡戸のような寛容と思想の柔軟さ、自由さと、忍耐が必要なのだとも考えさせられる」とされている。

筆者は右の諸論文につき、又各論文の相互関連につき論ずべき点を多くもっているが、ここはその場所ではないから別の機会を待ちたい。見られる様に、思想史研究の上に実に豊かな問題提起をしているので、あえて紹介の筆をとった次第である。（創文社刊・A5・三二二頁・六五〇円）　—中村　勝己—

＊　＊　＊

丸山真男著

『日本の思想』

この書物については、すでに多くの新聞、雑誌においてとりあげられている。それ故、内容の紹介は、いまさら必要ないであろう。ここではむしろ、丸山教授により提出された問題の基本点と、それが今日の日本の産業経営社会につながる問題点をのべ、最後にこの書に収められた理論のうち、われわれに身近かな問題性をもつものを指摘しておこう。

(1)　問題の基本線。いろいろな思想の雑居性——これが日本の思想の特徴である。この把握が教授の問題の出発点である。われわれの考え方を分解してみると、「仏教的なもの、儒教的なもの、シャーマニズム的なもの、西欧的なもの——要するに私たちの歴史にその足跡を印したあらゆる思想の断片に行き当る。」つまり、千年以前の昔から現代までの世界の思想的産物が日本の思想史のなかにストックされている事実、しかもそれらの各思想を全体として位置づけるような、そういう意味での原理的な思想が形成されなかった伝統。このような日本の思想的伝統に対する認識と反省から、日本の思想史的構造を出来るかぎり明晰に分析し、それを通じて、われわれの精神的成長を育くんだ思想的伝統から脱出すべき足場と契機をさぐり出そうとした、思索的苦闘の成果が本書なのである。

その意味で、ここには、丸山教授自身の内的思想の歩みとその際きざまれた問題点が、日本思想の史的構造の考察、分析と見事に融合しているのである。したがって、われわれは第一にこの書中に投影された教授自身の思想的運動の軌跡を追求すると共に、そのさし示す方向をさぐらねばならない。第二に、ここに理論化された日本思想の構造的関連のなかから、自分たち自身の問題をくみとり、それぞれの思想的軌道の確立が要求されるのである。

そのような角度から、つぎに三つの問題をあげようと思う。

(2)　「タコ壺文化」と「ササラ文化」の問題。丸山教授は、社会の基底に伝統的な共通のカルチュアーのある社会を「ササラ文化」とよび、最初から専門的に分化した知識集団イデオロギー集団が閉鎖的なタコ壺をなして、それぞれの内部でのみ仲間言葉をしゃべり、そこに共通の広場が形成されない社会を「タコ壺文化」として比喩的に表現し、日本の社会をタコ壺文化としてあざやかに規定された。さてわが国においては、タコ壺集団形成は知識集団、イデオロギー集団にのみ行われているのでない。日本の企業もまたタコ壺経営組織をもち、それに対応して労働組合もまたタコ壺組織をもっている。労使双方とも組織の近代化にあたり、厚いタコ壺の壁にぶつかっていることは、あまりに周知であろう。終身雇傭制、年功序列体系、閉鎖的労働市場そして企業別組合である。総評や全労の呼号にもかかわらず、日本の労働者は企業内に閉じこもって、労働者階級として企業を越えた横の組織に広がるべき、共通の社会的基盤も、共通の考え方も、もち得ないのである。日本の社会主義政党の弱さはこの点にある。一方、日本の経営者たちは、自己経営内部の従業員を、学歴別、性別、世代別、地域別などのこまかいタコ壺群の中に押しこめ、さらに他の経営体に対しては、自身が一つの大きなタコ壺組織体をなして、生産性の原動力としての機能的原理の発動にブレーキをかけ、自ら悩んでいるのである。

(3)　「する」価値と「である」価値。右にのべた機能的原理こそ業績本位を本体とする近代的原理であり、制度を身分化し固定化し、その存続維持を第一とする前近代的原理と明白な対極を形成する。この相対立する原理を教授は、「する」価値または「する」論理と、「である」価値または「である」論理として対置させた。機能的原理としての「する」価値が、資本主義的近代経済社会に典型的に打ち出されたことは、説明の必要ないことである。そして丸山教授が「する」価値の近代日本の先駆的代表として福沢先生をあげる時、まさにその点にこそ、近代日本資本主義の形成と慶応義塾との深いつながりが結ばれたのである。慶応義塾の日本近代史上における大きな位置は、右の「する」価値の主要な拠点たるところにあったのである。今日、われわれはこの伝統、つまり、「する」価値原理をよく保持させているであろうか。権利の上に眠る者に法的保護が与えられないと同じように、伝統の上にあぐらをかく者にはよく伝統を生かすことは出来ないであろう。伝統を革新することにより、かえって伝統に永続性ある生命力を吹きこむことこそ、われわれの課題であるが、その革新的主体は、われわれ自身により、自身のうちにうみ出されねばならない。丸山教授の「日本の思想」は少くとも、このことを教えると共に、そのための自己省察に強力な手がかりを与えないではおかないのである。（岩波新書・一九二頁・一〇〇円）　—石坂　巌—

＊　＊　＊

田村秀夫著

『イギリス革命思想史』

——ピューリタン革命期の社会思想——

本書の著者の問題意識は第一に一六四〇年から六〇年に到る英国の市民革命の把握の仕方にある。すなわち著者は一方で英国において伝統的であったピューリタン革命というとらえ方に対しては、クリストファー・ヒル以来の市民革命としてのとらえ方の積極性を承認するのである。しかし同時に著者は、後者の市民革命的とらえ方を一面的に主張することは英国革命が宗教的観念や利害の対立を強く表わしていたことを無視もしくは軽視する危険があると考えるのである。従って英国革命をイギリスの市民革命とピューリタン革命という二重の側面でとらえることが、革命の全体像の正しい把握になるというわけである。

さて著者の問題意識の第二は以上のような英国革命の把握の上で当時の社会変革活動とその行動を支えた思想を生き生きとした対応関係の中で描きだそうということにある。しかもこの場合著者が注目するのは、市民革命の課題である資本主義的生産力の推進に積極的に役割を果した人々の思想と行動よりも、むしろ革命の基本線から脱落しながらも、革命的エネルギーの供給源となった手工業者や農民の民衆グループの思想と行動なのである。何故ならこれらの諸思想は資本主義の発展に対決する近代社会思想の諸類型の原型を示しているし、またこれらの思想と行動の分析によって始めて英国革命の全体像も十分な